



2

3

4

学校連携事業「ミュージアム・クルーズ」

金沢21世紀美術館は2006年度より金沢市内にある67校の小学校と特別支援学校で学ぶ小学4年生約4,400名を対象に、「ミュージアム・クルーズ（以下、クルーズ）」と題した作品鑑賞プログラムを継続的に実施している。¹本稿では2007年度から2009年度までの3年にわたるプログラムを振り返り、美術館教育普及プログラムの一例における実践とその変遷を展望する。

出会いの場としてのミュージアム・クルーズ

クルーズでは小学4年生が8名程度のグループに分かれ、“旅の仲間”の意味を持つ作品鑑賞ボランティア「クルーズ・クルー（以下、クルー）」とともに、現代美術作品を中心とするコレクション展を見て回る時間が主となる。本プ

ログラムが小学4年生を対象としている主な理由として、9歳から10歳の発達および学習段階を挙げることができる。

当館が開館記念展に金沢市内の小中学生約4万人を学校ごとに招待した「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」では、地図を参考にしながら主体的に行動し、学校の仲間やボランティアらと作品を介して話し合う姿が小学校の中学年以上に多く見られた。事業終了後には、小中学校の教諭から校外学習の機会として継続実施を望む声があり、プログラム趣旨や子どもたちの成長段階、そして学校行事の過密性を考慮すると、小学4年生が参加対象として最適であるとの提言があった。²学習段階としては、小学校中学年図画工作科の学習指導要領に「鑑賞活動を通じて主体的に感じ取ることや、話し合う中で互いの理解に結びつける」ことが明記

されている。2008年度に改訂された箇所には「表現」と「鑑賞」の有機的理解についても触れられており、³美術教育の現場において鑑賞学習の充実が求められていることがわかる。

社会生態学者ピーター・F. ドラッカーは「コミュニケーションは知覚であり、その場合、発し手ではなく受け手があってこそコミュニケーションが成立する」と述べている。⁴クルーズではクルーが“教師や親とは異なる初対面の大人”として、人前で自分の意見を発表することに気恥ずかしさを覚える前の9歳から10歳の子どものたちと過ごすことで、自由闊達に意見を交換しやすい雰囲気うまれる。⁵クルーは子どもたちと一緒に作品を鑑賞する一方、作品を見る子どもたちの表情や体の動き、感想やつぶやき、疑問などを受けとめていく。この「受け手」としてのクルーが触媒となり、子どもたちは多



5

1. 2008年度コレクション展II「shell—shelter：殻—からだ」鑑賞風景
(北川宏人《ニュータイプ2003—ブラック》)
2. 2008年度コレクション展I「つながり」鑑賞風景(ジャン・ダグデン《アット・ホーム・ドット》部分)
3. 2009年度コレクション展「shift—揺らぎの場」鑑賞風景(村山留里子《無題》)
4. 子どもたちからの手紙より
5. クルーズ・クルー研修風景

- *1. シンポジウム「ミュージアム・エデュケーション」での紹介内容については、付属CD-ROM内p.42参照
- *2. 「座談会：ミュージアムを利用する」『ミュージアム・クルーズ・プロジェクト記録集』、金沢21世紀美術館、2005年、p.56
- *3. 「新しい学習指導要領(2008年3月28日)」<http://www.mext.go.jp>
- *4. 上田惇生『ドラッカー入門—万人のための帝王学を求めて』、ダイヤモンド社、2005年、p.77
- *5. 林寿美『美術館と小・中学校の連携』『まなざしの共有 アメリカ・アレナスの鑑賞教育に学ぶ』上野行一監修、淡交社、2001年、pp.118-120
- *6. クルーズ・クルーの応募条件は、①20歳以上(年齢の上限はない)②活動説明会や事前の研修(3回)に原則全て参加可能、③活動期間中、定期的な参加が可能(月3~4回程度)、④子どもが好き、⑤現代美術の鑑賞に関心があること。無償の活動で、美術館でのボランティア経験は不問としている。
- *7. プログラム専用ガイドマップに添付された小学生用の特別展とコレクション展の招待券引換券。2007年度から2009年度の3年間に422枚が利用された。

〔参考文献〕

- 『ミュージアム・クルーズ2007年度活動記録集』金沢21世紀美術館、2008年
『2008年度コレクション展ミュージアム・クルーズ記録集』金沢21世紀美術館、2009年
『2009年度コレクション展ミュージアム・クルーズ記録集』金沢21世紀美術館、2010年

様かつ相互的なコミュニケーションを体感していく。¹⁻³ 子どもたちはこの様子を心象風景として描くこともあり、⁴クルーもまた、世代を超えた出会いの中で互いの価値観や感受性とのふれ合いを積み重ねていく。

3年間の変化、そしてこれからに向けて

2007年度から3年間のプログラムを振り返ると、ボランティアの参加人数に変化があった。2007年度に37名だったクルーは4年目を迎える2009年度には51名となり、増加傾向にある。⁶ 初年度からのべ175名となるクルーの参加動機は「美術(館)が好き」「子どもたちとの活動に関心がある」「(4年生の時に参加した)我が子の感想を聞いて興味を持った」「金沢へ越して来たので友人をつくりたい」など、多岐にわたる。開館以来継続的に参加しているクルーが「この活動の醍醐味は、子どもの説明を聞きながら作品を見ることで毎回新しい気付きがあることだ」と語ったことがある。子どもたちにとっては最初で最後のクルーズだが、クルーは繰り返し参加するため、異なる子どもたちによる言動に毎回反応する姿勢が大切となる。そのた

めにも、クルーと美術館の担当スタッフは日々の活動に関する意見交換はもちろんのこと、研修を通じてそれぞれが抱く疑問や不安な点を共有し、多様なディスカッションを経て作品鑑賞の場がより深まることを目指している。2009年度には新たな試みとして、アーティストユニット「みかん電鉄」によるワークショップ形式の研修も行った。これはクルーが「子どもたちとの時間」を離れ、大人同士で作品を鑑賞することにより、人と人、そして人・作品・空間のつながりを、より多角的に捉える好機となった。⁵

子どもたちのアンケートによれば、初年度から変わらない傾向として、90%以上の子どもたちが再来館を望んでいる。クルーや学校の仲間たちと過ごした時間が楽しかったので、それを追体験するために「もう1回券」⁷を使うなどして家族と来館したい、などが理由として挙げられている。「まるびいに来たのは何回目ですか?」という設問に関しては、2007年度の小学4年生は開館記念展への招待プログラムに当時小学1年生として参加したため、初来館者は3%だったのに対し、翌年以降は同数値が20%に増加した。美術館までの地理的距離やさまざまな家庭環境の子どもがいる中で、クルーズを通じた美術館体験を学校活動の一

環として実施する意義は大きい。継続事業であるクルーズが「4年生の年間行事」として学校内で定着したことで、来館前の準備や引率者間の情報共有が円滑になったという報告もあった。そして学校関係者を対象とする会場事前視察では、従来のキュレーターによる作品解説に加え、2009年度より引率する教員が主体的に作品へ向かい合う鑑賞の時間を設けた。これにより、学校と美術館の双方で、子どもたちが作品と新鮮に出会うための環境整備への理解を深めていった。

5年目以降のクルーズが深化していくために重要なことは何か。それはプログラムに関わる大人がそれぞれの立場や役割を認識し、尊重しあいながら、子どもたちにとって「出会いの場」となるプログラムを柔軟に育てる姿勢を共有していくことである。この継続的な取り組みが美術館における幅広い対象に向けたさまざまな教育普及事業を展開する上で布石となるよう、有機的に取り組んでいきたい。

(吉備久美子/エデュケーター)